

10・魔女と黒のお姫様

本編『09・はじめて上になって騎乗位と正常位貝合わせセックスするけど負ける』の翌日。

とある年の春。

五月二十九日。七時前。

場所は主人公とミネルヴァが泊まったホテルの一室。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

今日も素晴らしい気候だ。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0―7秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【▲1 で、S E 5と切り替わる】

S E 2 主人公がベッドで動く音

【最初から最後まで流す】

主人公、ベッドで目を覚ます。

しかし、隣にミネルヴァがいない事に気づく。

これは一体どういう事か。

慌ててベッドから飛び起き、すぐにその姿を探し始める。

S E 3 主人公が部屋を歩く、早歩きする足音

【最初から最後まで流す】

【0—15秒ほどまでは通常の速度で、部屋の中を歩いているイメージ。15秒目あたりから早歩き。焦って部屋の中を歩き回り、ミネルヴァを探しているイメージ】

だが……部屋中のどこを歩き回っても、ミネルヴァは見つからない。
荷物はあるようだ。

そもそも今日は学会なのだから、急にいなくなるといった事は考えにくい。

それでも……主人公はだんだん不安になってくる。

〈主人公〉

「……………」

ゆえに主人公は、寝巻のまま外へ出ていく。

靴だけを履き替えて、もう、ほとんど起きたままの格好で部屋を出る。

それは、ミネルヴァと初めて出会った日より、よっぽどひどい格好だ。

せっかくミネルヴァに美しい服も上着もアクセサリーも与えられているのに、今はそれを身に着ける余裕もないのだ。

だけど、本来自分はそのような人間だったような気がする。周囲にさんざん言われたが、一度こうだと決めると他が見えない。

ミネルヴァには申し訳なくもあるが、これはこれで自分らしいのかもしれない。

SE 4 主人公がホテルの部屋のドアを開けて、閉める音

【最初から最後まで流す】

【閉まる時の音は少し小さめにする】

【ドアが開いた動作から、SE 5と重なって流す】

▲ 1 ここでS E 1と5が切り替わる。

S E 5 外の環境音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【S E 4の、扉が開くとともに流れ始める】

【外の音が、部屋の中から聞こえる】

【ごく小さな音量で流す】

【S E 6とともに一度フェードアウトした後、場面転換して再開する】

S E 6 主人公の走る音

【最初から最後まで流す】

【7秒目あたりからフェードアウトして場面転換する】

……まったく！ ミネルヴァったら、どこへ行かれたのかしら……！

こうして主人公は、ホテルの廊下へ出た。

しかし、そこにもミネルヴァは見当たらない。

となると一階か、外だろうか。

それにしても……昨日は気に留める間もなかったが、つくづく素晴らしい建物だ。落ち着いた中にも高級感が漂い、主人公のような一般市民には、少々気後れしてしまうような場所である。

ここは内装だけではなく、庭園にもこだわっているとミネルヴァから聞いた。

今だって、こんな状況でなければ、ぜひミネルヴァと歩いてみたいところなのだが……。

ん？

……もしかして、そちらへ行ったのかしら。

主人公、ここでふと立ち止まり、窓の外を見る。

すると、予想は当たった。

随分奥の、赤い花が咲き誇るエリアに、ミネルヴァらしき人物が歩いている。

〈主人公〉

「……………あー……………！」

主人公、彼女の居場所を知って倒れそうなほどホツとしつつも、速度は落とさず、いやむしろ上げて、今度は庭園へ向かって走る。

ここはどたどた走るような場所ではないとわかっているが、それでも走っていく。

……思えば自分は、昨日から急いでばかりだ。

ミネルヴァという女性が、どこまでも主人公をかき乱すからである。

やっと気持ちに通じ合えてホツとしたかと思ったら、今度はこうして消えて見せて、驚かせて……………。

——でも、自分には、そのくらい刺激で一杯の恋愛の方が合っているのかもしれないと思う。

一度フェードアウトする。

SE5 フェードアウトした後また再開する。

SE7 主人公の走る音2

【最初から最後まで流す】

【0―9秒ほどまで流した、一度止まるタイミングで次の『ミネルヴァ』のセリフを流す】
【ミネルヴァのセリフが終わってすぐに再開し、走って接近するイメージ】

数分後。

ホテル内、庭園。

主人公、視界にミネルヴァの姿を確認すると、そのまま走っていく。
我ながら速い、人生史上最速が出せているような気がする。

そのくらい、今はミネルヴァに会いたいのだ。

早くその危なっかしい腕を、心をつまえて、思いつき抱きしめたいのだ。

▲ ボイス加工あり

【10メートルほど離れた位置から聞こえる】

【フェードインする】

【主人公から走り寄っていく】

【だんだん近づいてくる】

● 正面 50センチ

【「きよ」とんとして。

さほど驚いてはいないが、不思議そうに。

まだ部屋で寝ているだろうと思っていた主人公が、ものすごい速度と形相で駆け寄ってくるので。

主人公がなぜ、そんな事をするのかわからないので」

……あら？

どうしてこちらへ……？」

〈主人公〉

「ミネルヴァー！」

ここで、距離が2メートルほどまで近づき、主人公が飛びつく事で『正面0センチ 上10センチ』まで近づく。

SE8 主人公がミネルヴァに抱き着く音

【最初から最後まで流す】

主人公、ミネルヴァが驚いているのにも構わずさらに速度を上げ、飛び込むように倒れ込んで、腕を回してしがみつく。

このように抱きつく事を『胸に飛び込む』と表現する事がある。

だが、実際にそうしてみるまでは、ずいぶん大げさな言い方だと思っていた。
しかし、やってみてわかった。
これはなかなか気分がいい。

▲ ボイス加工あり

【2メートルほどから0センチまで接近するように聞こえる】

【主人公から走り寄っていく】

【だんだん近づいてくる】

● 正面 0センチ 上10センチ

【少し驚いて。

主人公がいきなり抱きついてきたので。

『走ってこちらに近づいてくる』という事は理解していたが、この行動には驚いたので』
……あっ!!」

〈主人公〉

「……もう……!!」

探したのよ……!! 一体、どこへ行ってしまったのかと思ったの。
とてもとても、心配したのだから……!!」

●正面 0センチ 上10センチ

「【少し申し訳なさそうに。

ミネルヴァとしては、少し外に出るだけのつもりだった。

だが、自分の行動が主人公を心配させてしまったらしいと気づき『私はまた、主人公さんを心配させてしまったのね』と理解して、申し訳なくなったので」

あ………」

〈主人公〉

「……目が覚めたら、あなたがいなくて。

本当に驚いたのよ……！」

びっくりさせないでただけるかしら！」

すねた口調で抱きしめる腕の力を強めれば、さすがのミネルヴァもようやく事態を理解したらしい。

数秒遅れて、あわあわと、申し訳なさそうな声音で話し出す。

ミネルヴァ、主人公の顔を見ながら話すために『正面15センチ 上10センチ』の距

離まで離れる。

●正面 15センチ 上10センチ

「【申し訳なさそうに。

ミネルヴァとしては、本当にすぐ戻るつもりではあった。

だが、**またも説明不足のせいで主人公に心配をかけてしまった事を謝罪する**】

……そうよね。何も言わずに出てきてしまつて、驚かせてしまつたわよね。

御免なさい」

——しかし、冷静になれば、少し姿が見えないからと言ってここまで慌てふためいた自分の方がおかしなやつのような気がしないでもない。

だんだん冷静になって来た主人公は少々恥ずかしくなるとともに、本来、朝、顔を合わせたのなら、まず言うべきだろう言葉を思い出し始めた。

〈主人公〉

「あ、あと、それから……」

ミネルヴァ、会話するため、『正面15 上10センチ』から『正面30センチ』の距離

に戻る。

●正面 30センチ

「【とても優しく続きを促す。

さっきまで大慌てですごい剣幕だった主人公が、今度は恥ずかしそうに、照れくさそうにしているのが可愛いので」

うん？」

〈主人公〉

「おはよう……。昨日はどうも、ありがとう。
それから」

主人公、挨拶もそこそこに一度離れて向き直ると、すぐさま、意を決して切り出す。

こういうのは寝起きの、実質的にまだほとんど寝ている頭にはつらいものがある。

だが……ミネルヴァと付き合うなら、少しでも明確に、かつ頻繁に伝えなければいけない事があると、主人公はもう知っているのだ。

●正面 30センチ

「【さらにもう一段階、とても優しく続きを促す。

さっきまで大慌てですごい剣幕だった主人公が、今度は恥ずかしそうに、照れくさそうにしているのが可愛いので」

うん」

〈主人公〉

「……好き。

それを早く言いたくて……来たの」

●正面 30センチ

「【※息遣いのみ※ で表現する。

驚いたような、感嘆するようなため息。

主人公の『早く言いたかった事』があまりにもかわいらしいので」
……。

【とても優しく。

こんな時まで『おはよう』と昨日のお礼を欠かさない主人公が、とにかく可愛らしいので」

ふふ……
♥

それを伝える為に、ここまでいらして下さったのね。

【一つ一つ丁寧に、心を込めて。

少し間をあけて一つずつ言う。

主人公の言葉に、誠実に、愛情をこめて返事をする】

おはよう。

私も愛してるわ。

【とても優しく、言い聞かせるように。

主人公の行動にお礼を述べる】

探しに来てくれてありがとう」

ミネルヴァ『正面30センチ』から『正面0センチ』の距離まで近づいて、キスする。

●正面 30〜0センチ

「【※近づきながら※ 話す。

キスの予備動作】

んっ……」

〈主人公〉

「あ……♡」

主人公の顎に、ミネルヴァが自然と手を添える。

そうされるとともに、主人公はそっと斜め上を向くように顔を動かして……自然に触れてくるその唇を受け入れた。

朝の庭園でのキスなんて、まるで恋愛劇のようだ。

●正面 30〜0センチ

「【※近づきながら※ キスする。

軽く触れるだけだが、甘々なキス】

ちゅっ♡」

そう……これも、先ほどまではまるで見渡す余裕もなかったが……このロケーションはなかなかロマンチックだ。

漠然と赤い花のようだと思っていた花たちはどうやらすべて薔薇で、それぞれが大輪の花をつけてこの場を彩り、美しいものになっている。

このように慌ててきたのでなければ、また主人公の服装が寝巻でなければ、もっと素敵
なひとときを過ごせるであろう空間である。

……むむ。ひとまずわたしの格好はさておいて。
どうしましょう、なんだかどきどきしてきたわ……。

主人公、あまりにも美しい光景にときめくあまり、つい胸がきゅんとして、このままミネルヴァに甘えたいくなるが……そこを何とか耐えて、次に質問すべき事を聞いた。

〈主人公〉

「ところで……どうしてここへ？」

ミネルヴァ、会話するため『正面0センチ』から『正面30センチ』の距離に戻る。

●正面 30センチ

「【穏やかに優しく。】

主人公の質問に答える。答えても何の差支えもない事なので」

ああ……それはね。

昨日、窓からこの庭園が見えたから。

一度来てみたいと思っていたの」

〈主人公〉

「……あら、そうだったの。

確かにここ、とても美しいわね……！

あなたが惹かれるのもわかるわ。

もし、わたしが先に目覚めていたら、同じようにここへ来ていたかも」

●正面 30センチ

「【少し恥ずかしそうに、もごもごと照れて、なんだか言いにくそうに。

こちらは、ミネルヴァにとっては言いづらい事なので】

それで、その」

〈主人公〉

「……ん？」

そしてこのまま、ごく普通の会話が始まるはずだった。

しかしミネルヴァは何か言いたげで、もごもごしている。

普段はどんなに言いづらい事でもさらりと平気で言うくせに、この魔女は妙な所で急に

照れだすところがあるのだ。

● 正面 30センチ

「【少し恥ずかしそうに、もごもごと照れて、なんだか言いにくそうに。こちらは、ミネルヴァにとっては言いづらい事なので。

『貴方と……』は『貴方と来たい』の略】

今日の学会が終わったら、貴方と……と、思っていたのだけれど。先程目が覚めてしまって。

それで、少し歩きたくなつて。

何となく外へ出ていただけなのよ」

〈主人公〉

「なるほどね……。

だったら、起こして下さってもよかったのに」

だが、彼女がそうだったからには、このまま相槌に徹するのがいいだろう。主人公は、

起こして下さったのなら、一緒に見に来られたじゃない。

と言いたくなるのをこらえ、ひとまず続きを促す。

ミネルヴァという人間はどれだけ付き合ってもよくわからないところがある。だが、それを知っていくために主人公はここにいるのである。

●正面 30センチ

「【少し申し訳なさそうに。

その上もごもごと照れて、なんだか言いにくそうに。

こちらは、ミネルヴァにとっては言いづらい事なので】

……あ、その。ええつと……。

貴方と来たかったのだけれど。

一人で、頭を冷やしたくもあつたの」

しかし、ミネルヴァの次の言葉は、主人公のそんな複雑な心境を救った。

ミネルヴァは目を恥ずかしそうに泳がせながら、自分もまた同じ気持ちでいた事を告白してくれたのだ。

〈主人公〉

「え？」

● 正面 30センチ

「ものすごく恥ずかしそうに、小さな声になって。

でも、意を決した様子で、素直に気持ちを打ち明ける。

こちらは、ミネルヴァにとっては、ものすごく言いづらい事なので。そんな自分を、できるだけ主人公には見せたくなかったのですね。」

その。実は。

これから発表をしに行く事が、怖くて……」

〈主人公〉

「……そうなの？」

てっきり、あなたは余裕なのだと……」

主人公、つい驚きながら、

……だって、つい数時間前まで。

この数日を取り戻す勢いで、人の事めちやくちやにしてくれていたじゃないの……。

と、思わずつつこみを入れたくなるが、今そうするのは、やはり野暮である。

どうやらこれは、ミネルヴァにとって、とても真剣な告白らしい。

●正面 30センチ

「『少し恥ずかしそうに、どこかすねたように。』

かわいく、ぼそぼそと。

だがもう観念して、全てを打ち明ける。

とても恥ずかしいし、できる事なら言いたくはなかったが、主人公には聞いてほしくもあるのだ。

ミネルヴァとしては、本編02と逆の状況になっている。

あの時ミネルヴァは全く他意なく、単なる『必要な情報』『妥当な質問』として、主人公に性がらみの質問をした。

その時主人公が『なぜそんな事を聞くのだろう』と思いながらも、ものすごく恥ずかしがりながら答えたのと、逆の状況が今起きているのである。

つまりミネルヴァとしては、この話題は『主人公にとっての性の話題』と同じくらい恥ずかしいのである」

私が、余裕？　とんでもないわ……。

実は、物凄く緊張しているの。

だって学会なんて、いつぶりか忘れてしまう程久しぶりなんですもの。
汽車の乗り方だって、すっかり忘れていて。

乗る時も、駅員さんに凄く迷惑をかけてしまったわ」

〈主人公〉

「……えっ……？」

それなのに、どうして……？

あなたほどの方なら、お声は毎回かかっていたはずよ。

それなのに、そんなにお久しぶりの参加だったなんて知らなかったわ。

……もしかして、今回はそんなにも、重要な発表だったのかしら？」

● 正面　30センチ

「【ものすごく恥ずかしそうに。

かわいく、ぼそぼそと】

……いいえ。それも、違うわ」

なので主人公は、話をの腰を折らぬよう、ごく妥当な問いかけだけを重ねていく。しかし、そのつもりでも、ミネルヴァはどんどん恥ずかしそうに、もごもごとした口調になっていく。

もしかすると、少し見当違いの事を尋ねているのだろうか……。

●正面 30センチ

「『ものすごく恥ずかしそうに。』

かわいく、ぼそぼそと。

主人公が何の他意もなく、純粋な疑問として尋ねてくるのが、とにかく、とにかく恥ずかしい。

ミネルヴァとしては、本編02と逆の状況になっている。

あの時ミネルヴァは全く他意なく、単なる『必要な情報』『妥当な質問』として、主人公に性がらみの質問をした。

その時主人公が『なぜそんな事を聞くのだろう』と思いつつも、ものすごく恥ずかしがりながら答えのたと、逆の状況が今起きているのである。

つまりミネルヴァとしては、この話題は『主人公にとっての性の話題』と同じくらい恥ずかしいのである」

今回参加を決めたのはね。

『絶対にしなければならない重要な発表がある』ですとか。
『誰かに強くお願いされたから』といった事ではないの」

〈主人公〉

「……では、どうして……？」

● 正面 30センチ

「【ものすごく恥ずかしそうに。

消え入りそうな声で、でも、はっきりと言う。

ものすごく恥ずかしいが、主人公に走っておいてほしいし、聞いてもらいたい事なので】

……貴方に。

私でも、ちゃんと。

格好よくお仕事ができるのだと、知って頂きたかっただけなの……」

〈主人公〉

「……ええっ？」

そうしてとうとう出された答えは、またも予想外だ。

主人公はこれまで、ミネルヴァという人間はいつでも自由に生きていて、他人にどう見られているのかなど……全くとは言わずともあまり気にしないというか、どのような評価も受け止めている類の人間なのだと思っていた。

しかし、主人公に対してはそうではなかったようだ。

それを知ると、主人公としても、なんだか途端に照れてしまう。

●正面 30センチ

「『少しすねたように、かわいく。』

主人公が自分の気持ちにまるで気づいていなかった事が、少し恨めしいので。以前とは逆の構図になっている。

これまではミネルヴァが主人公の気持ちにまるで気づかず、ミネルヴァは主人公にもどかしい思いをさせる事が多かった。

しかし、今はそれが逆になってしまっているのだ」

そうよ？

それでも、貴方の前では。

いつでも、少しでも……。

素敵な自分をお見せしたいと思っているのよ？

なのに、ちっとも気づいて下さらないなんて、ひどいわ」

〈主人公〉

「……ごめんなさい……！」

でも、本当に想像もつかなかったの。

だってミネルヴァって、お仕事に関しては、なんでも淡々と、完璧にこなしてしまうでしょう？

だから、今日の事も余裕なのだとばかり……」

● 正面 30センチ

「少し拗ねつつも、納得した様子で。

よく考えれば、またも自分の説明不足が原因な気がしてきたので。

ミネルヴァはこの半月ほど、主人公にもっと好かれるために自分を変えようと、自分なりに様々な努力をしてきた。

それは無駄ではなかったし、そこそこの成果をあげたと自負している。

だが、説明不足に関しては、結局まだ改善に至ってはいない。

そもそも改善できていたのなら、今も主人公を心配させなかったと気づいたので」

……でも、そうね……。

そうよね。

確かに、説明不足だったかもしれないわ。

今だって、何も言わずにここへきて、貴方を心配させてしまったし」

〈主人公〉

「ふふ……。それはいいのよ。

わたしもちよつと慌てすぎていたわよね。

部屋にはあなたのお洋服も荷物だってあったのに。

つい、居てもたつてもいられなくなってしまつて……」

● 正面 30センチ

「『穏やかに、だが意を決したように切りだす。』

どんなに至らない部分があつてもいつも自分を支え、愛してくれる主人公に、改めて伝えたい事ができたので」

……あのね」

〈主人公〉

「え？」

だけど誤解が解けた頃、ミネルヴァがふと切り出した。

その姿はもじもじした様子から少ししやんとしたものに変わり、主人公もそれにならうように、思わず背筋を正した。

どうやら、ここまでの話とはまた違う……とても重要な話を話したいようだ。

●正面 30センチ

「【穏やかに、だが少し申し訳なさそうにもごもごと。

自分の気持ちを、改めて語り始める。

ミネルヴァは主人公を好きになって、これまで特に気にしていなかった自身の欠点を、たくさん意識するようになったので。

なので、自分は主人公にはふさわしくない、だめな人間のように感じる事も増えたので。しかしそれでもなお主人公と一緒にいたいし、いてほしいので」

私はこうい……その。

足りない所の多い人間だから。

きっと、これからも、貴方を困らせたり、悲しませたりする事が、あるかもしれない……

【少し間をあけてから。

穏やかに、でも真剣に。

ミネルヴァとしては、これが今二番目に主人公に伝えたい事なので」
でもね。それでも私は、貴方と一緒に居たいの。

【少し間をあけてから。

少し自信なさげに、でも、真剣にお願いする。

ミネルヴァはこれからも、ずっと主人公と一緒に暮らしたいので。

だが、それは自分の心の中にとどめる事ではなくて、主人公にはっきり伝えるべき想いだということ、今のミネルヴァはわかっているのだ」

わがままで、図々しいお願いだという事はわかっているわ。

……でも。これから、私の事を、もっと知ってもらって。

貴方の事も、もっと知りたい。

そんな風にして……もっと良い関係になって。

貴方の未来を、ずっと支え続けたい。

【少しだけ慌てて、付け加える。

この言い方では『今の駄目の自分を変えるつもりはないが受け入れてくれ』と言っている、捉えられかねないので。

全くそうではない事を補足する」

勿論、自分のよくないと思う所は、これからも、積極的に。
変えていくつもりよ。

少しでも……貴方が、一緒に居たいと思える人になりたいから」

〈主人公〉

「……！」

真剣な告白に、胸が高鳴る。

これまで、言葉でも、触れ合う事でも、幾度となく想いを伝え合ってきたつもりだった。それでもこうして改めて伝えられると、夢の中にいるような熱い感動がこみ上げる。好きな人が、自分との未来をこんなに考えてくれている。

自分の人生に、こんな幸福な瞬間があるのかと、呼吸まで止まるような思いだ。そんな風に、主人公が胸をいっぱいにしてしていると……。

● 正面 30センチ

「『少し間をあけてから。』

意を決したように切り出す。

ミネルヴァとしては、これが今一番主人公に伝えたい事なので」
だから……契約期間が終わっても。

これからずっと、私と。

私の、お嫁さんとして……一緒に居てくれますか？」

〈主人公〉

「……えっ？」

ミネルヴァが、想像をはるかに超える事を言った。

●正面 30センチ

「【しばらく間をあげてから。

きよんととして。

主人公が予想外の反応を見せたので。

『断られるのではないかと感じて不安』ではなく『どうして『えっ？』という反応になるのかしら』と言う感じの『……え？』

……え？」

〈主人公〉

「い、今、なんておっしゃったの……？」

●正面 30センチ

「『穏やかに優しく、きよとんとして。

ミネルヴァは勘違いをしているので。

『なるほど、主人公さんは今、風か何かで、単純に私の言葉を聞き取れなかったのね。では、もう一度お伝えしましょう』という感じで。

ミネルヴァは、主人公が『お嫁さん』という単語に驚くあまり言葉が出なくなっている事に、まるで気づいていないので」

？ お嫁さんとして、一緒にいて欲しいと、お伝えしたの」

〈主人公〉

「……わたしが、あなたのお嫁さん？」

思わず、主人公は聞き返してしまう。

もちろん、将来的にそうなれたらという願望はあった。

しかし、まだ出会って一か月も経たない二人である。

願うならまだしも、実行に移すには早いと思っていたのだ。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

とても優しく、それが当然であるかのように話す。

どこか、出会ったばかりの頃。

前日譚02や、トラツク01の『きよとんと、だが真剣にとぼけている感じ』のミネルヴァに近くなる。

ミネルヴァは勘違いをしているので。

それでも『確かに、また説明が足りなかったかもしれないわ。急にお嫁さんと言われても、これまで私が勝手にそう思っていただけだし……』と、反省するところまではよかった。

しかし『でも、主人公さんもこんなに好きと仰ってくれているのだから、将来を考えてくれていると思うのだけれど……』と発想が飛躍し始める。ミネルヴァにとって、真剣交際イコール、結婚を前提としたお付き合いなので。

さらに『あつ。もしかすると、私たちは二人とも女性だから、婚姻における『お嫁さん／お婿さん』という言い方に、主人公さんは違和感を覚えているのかもしれないわ。ちゃんと説明しなくちゃ』と、妙な方向に話を捉え始めたのがいけない。

『二人ともお嫁さんになるのよ』という『確かにそうなのだが、そういう事を聞いている訳ではない』と言う感じの、奇妙な解説を始めてしまう――

そう。貴方がお嫁さん。

でも、私も女だから……私も、お嫁さん。
うん。二人で、お嫁さん」

〈主人公〉

「……！」

それでも、そこまで言われてよくわかった。

ミネルヴァにとっては、自分たちがそうなるのは主人公の合意さえ得られれば自然な事で。ここまでの発言に引っかけがあるとしたら、それは結ばれた後のお互いの呼び方くらいなのである。

つまり、それほどまでに……ミネルヴァは、主人公を想っていてくれるという事だ。

●正面 30センチ

「『穏やかに優しく、きよとんとして。』

でも、少し不安そうに。

それでも自分なりにきちんと説明をする。

『主人公さんを、自分のお嫁さんと思う根拠』について述べる。

ミネルヴァにとって、真剣交際イコール、結婚を前提としたお付き合いなので。

主人公も多少はそれを理解してくれた上で、自分と一緒にいてくれていると思い込んでいたのだ」

あの……。何かおかしかったかしら。

私、もう、ずっと。

初めて『好き』とお伝えした時から。

ずっとそのつもりで居ただけれど……」

〈主人公〉

「……………！」

そんなミネルヴァのさらなる告白に、主人公はもう言葉も出なくなる。

そうか、ミネルヴァは、あの時からずっとそのつもりで居てくれたのか。

それなのに『その場の気分でそう発言したのではないか』などと疑った自分が恥ずかしい。

ミネルヴァと自分の関係を脅かすのは、いつも自分の心の弱さなのだと、主人公は実感する。

であれば、それを乗り越えるほかはない……。とも。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく、きよとんとして。」

『やはり、完全には伝わっていなかったのね』と納得しつつ、少し残念そうに「あら……。もしかして、伝わっていなかった？」

「優しく、ほんのり程度にかわいく拗ねる。」

残念には思っているが、今のミネルヴァは『確かに伝え方が足りなかった』と素直に反省できるようになっているので」

あれでも、とても勇気を出して告白したのよ……？

「少し間をあけてから。」

穏やかにとっても優しく。

『正しく伝わっていないのであれば、今、再度伝えよう』と言う感じで「じゃあ、もう一度言うわ。」

「少し間をあけてから。」

穏やかに優しく、でも、真剣に。

改めて主人公への気持ちを、微笑みながら述べる」好きです。

私は初めて貴方と過ごした日から、貴方の事が、女の子として、魔法薬師さんとして、助手さんとして、大好き。

「少し間をあけてから。」

穏やかに優しく、でも、少し不安そうに。

ミネルヴァは『きっと主人公さんなら、私の気持ちを受け入れて下さるはず』と、主人公を信じている。

だが、それでも、少し不安になってしまい、主人公の答えが気になるので」

だから、私のお嫁さんになって。

私だけのお姫様になって欲しいの。

如何（いかが）、かしら……？」

〈主人公〉

「もちろんよ……！」

だから主人公は、これまでの迷いを振り切る。

ミネルヴァの手を握り、深く頷くと『イエス以外の言葉があるはずもない』という事を、明確に伝え始める。

ミネルヴァとずっと一緒にいる事は、主人公の何よりの願いだ。

それが叶うのなら、また、ミネルヴァも同じ思いでいてくれるのなら……もう、なんだってできる気がする。

その位、主人公だって、ミネルヴァを想っているのだ。

● 正面 30センチ

「小さく、だが、とてもホツとした様子で。

主人公が手を握ってくれ、深く頷いてくれたので」

「……あ……！」

〈主人公〉

「もちろんよ。もちろん、なのだけれど……」

● 正面 30センチ

「優しく続きを促す。

主人公が、何やら伝えたい事がある様子なので」

「……うん？」

〈主人公〉

「わたしからも改めて、お伝えしたいの。……いいかしら？」

● 正面 30センチ

「穏やかに優しく続きを促す。

ひとまず『もちろん』と言われ、少し心の余裕ができたので」
ええ、聞かせて」

〈主人公〉

「わたしも、ミネルヴァの事が、大好き。

初めて、会った日。

まだお互いの事何も知らないのに。

それでもわたしの事を心から心配してくれて、不安や悩みをずっと聞いてくれて。
受け入れてくれた時から、ずっと、好き……！」

主人公の言葉を一つ一つかみしめるように、ミネルヴァが深く頷いてくれる。

気持ちを通じ合っているという事は、なんと幸せな事なのだろう。

一つ言葉を受け入れられるたびに、主人公は強くなれる気がする。

● 正面 30センチ

「「とても嬉しそうに。」

感激して、やや前のめりに、続きを促す。

主人公の言葉を、もっと早くももっとたくさん聞きたいので」
ええ」

〈主人公〉

「わたしもあなたと一緒にいたい。

今はまだ未熟でも。女性としても、助手としても……あなたを支えられる人になりたい」

● 正面 30センチ

「【さらにもう一段階、とても嬉しそうに。

感激して、やや前のめりに、続きを促す。

主人公の言葉を、もっと早くももっとたくさん聞きたいので」
ええ」

〈主人公〉

「だから、わたしこそ、どうかお願いします。

わたしを、あなたと歩む人にさせて下さい。

これからずっと、あなたのそばに居させて下さい……！」

● 正面 30センチ

「とても嬉しく、感激して。

また、とても安心する。

主人公の口から改めて、一緒に居たいという言葉が聞けたので」
ええ……！

【安心して、とても嬉しそうに笑う】

ふふ。ふふっ。ふふふふっ♡」

〈主人公〉

「！」

言い終えた途端、ミネルヴァが大きく笑った。

こんな顔、初めて出会った頃には想像もできなかったほどの笑顔だ。それは、それだけ二人の関係が進んだ証拠なのだと思いたい。

これからもっと、彼女の色々な顔が見られる兆しなのだと思いたい。

● 正面 30センチ

「※大きくため息をついてから※ 話す。

それから急にへたり込むようにして、とてもホッとした声を出す」
……ああ、よかった……。

もしお断りされたら、どうしようかと思ったの。

【少し困ったように。

自宅にいる、他の自分たちについて述べる。

距離がある以上、今はあまり他の自分がどうしているかは、詳しくはわからない。

だがそれでも、三人の落胆や淋しさが伝わってくるので」

だって、どの私も、もう貴方なしでは生きていけないわ。

一晩離れただけなのに、植物の私も、液体の私も、石の私も。

もう貴方の帰りを待ちわびている。

【優しく、はつきりと。

他の自分達だけでなく、今ここにいる自分も含めて、主人公を愛している事を、はつきりと伝える。

主人公には何度でも、沢山気持ちを伝えたいと思っているので」

早く貴方に会いたいという気持ちだが、こんなに離れていても伝わってくる位。私は。私達は……貴方を愛してるの」

〈主人公〉

「……………！」

ミネルヴァ 『正面30センチ』から『左0センチ』に移動して話す。

● 左 0センチ

「『とても優しく、そつと尋ねる。』

穏やかだが、今すぐにでもキスしたくてたまらないという感じで。

昨日指摘があつたので、今日も最初に確認する。

だから、ね？

また。

キス、してもいい？」

〈主人公〉

「……………うん……………♡」

ミネルヴァ 『正面30センチ』から『正面0センチ』に移動して話そうとするが……………。

● 正面 30〜0センチ

「※顔を近づけながら※ 話す。

優しく微笑んで。

キスしようと、顔を近づける」

ふふ……♡ ん……っ」

目を閉じれば、ミネルヴァの気配が近づく。

いくら周囲に誰もいないからって、外で堂々とキスするだなんて、主人公もずいぶんと変わったものである。

だけど、今はそうしたい。

自分の心に正直に生きる事こそが、自分を幸せにする方法だと、強く思えるからだ。

だが、こうして二人が、もう一度唇を重ねようとした時……。

▲ ボイス加工あり

「10メートルほど離れた位置から聞こえる」

「背後から聞こえる」

「遠くから、フェードインするように聞こえる」

〈ホテルスタッフ〉

「主人公とミネルヴァに話しかけている。

少し声を張って。少し息を切らして。

ここまで走ってきたので。

遠くから呼びかけるイメージで。

10メートルほど離れた位置にいる主人公とミネルヴァに声を届けようとしているので。

ホテルスタッフは、十代後半の少年。

年若いがいしっかりしていて、仕事にも慣れている感じで。

『中性的でかわいいシヨタが成長して、物腰柔らかい少年になった』というイメージで」

すみませーん……！」

遠くから、若い男性の声が聞こえてきた。

それはただならぬ剣幕で、二人は慌てて身体を離すと、そちらを注視する。

● 正面 0センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

突然の出来事に、驚いて息をのむ感じで」

！」

SE9 ホテルスタッフが走ってくる音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

【だんだん近づいてくる】

〈ホテルスタッフ〉

「主人公とミネルヴァに話しかけている。

少し声を張って。少し息を切らして。

ここまで走ってきたので。

遠くから呼びかけるイメージで。

5メートルほど離れた位置にいる主人公とミネルヴァに声を届けようとしているので。

少しほっとした感じで。二人を比較的早く見つける事が出来たので」

ああ、ミネルヴァ様と、お連れ様！

こちらにいらっしゃったのですね……！！

【少し申し訳なさそうに。】

少し息を切らしているが、ほぼ通常に戻る。

ホテルスタッフは、二人の会話は聞いていない。いい雰囲気だった事も、勿論知らない。だが『朝から二人で庭園を散歩していたようだ』という事はわかる。

『なのに、自分が邪魔してしまって申し訳ない』という気持ちがあるので」朝から大変申し訳ございません……。

今、少々お時間よろしいでしょうか？」

●正面 30センチ

「ホテルスタッフに話しかけている。

驚きつつも、落ち着いて対応する。

昨日駅員と話していた時よりも落ち着いていて、大人っぽいイメージで。

やはりそれは『主人公に格好いいところを見せたい』ので」

ええ、勿論よ。一体、如何（いかが）なさったの？」

彼の言葉を受け、ミネルヴァが返事をする。

隣の主人公もうんうんと頷いて、続きを促す。

〈ホテルスタッフ〉

「ミネルヴァに話しかけている。

少しほっとした様子で。

穏やかに、落ち着いて用件を伝える」

ミネルヴァ様に、お客様がお見えです。

なんでも、お財布の件でお伝えしたい事があると、おっしゃっておられまして……！」

●正面 30センチ

「ホテルスタッフに話しかけている。

※息づかいのみ※ で表現する。

驚いて。それは恐らく、昨日の駅員だろうと思ったので」

……！」

〈主人公〉

「！」

しかしその要件は、二人にとってあまりにも意外で、かつ期待してしまうものだ。二人は驚いて顔を見合わせ、目くばせをする。

その件を知っているという事は……間違いなく、昨日会った駅員だろう。

●正面 30センチ

「丁寧に、案内してくれないかと相談する。

昨日駅員と話していた時よりも落ち着いていて、大人っぽいイメージで。

やはりそれは『主人公に格好いいところを見せたい』ので」

昨日お会いした駅員さんだわ。すぐに参ります。

案内していただけるかしら？」

〈ホテルスタッフ〉

「ミネルヴァに話しかけている。

少し声が明るくなって。

邪魔をしたかと思ったが、二人が協力的で安心したので」

はい、勿論でございます。

では……！ ご案内いたします。

このまま私（わたくし）について来て下さいますか」

●正面 30センチ

「ホテルスタッフに話しかけている。

丁寧、深く頷く。

それは、わざわざ探しに来てくれたホテルスタッフに誠実に対応したいという気持ち
がまずあるが、やはり主人公の前では、意識して『大人のお姉さん』感を出していき
たいので

ええ……！」

〈主人公〉

「はい！」

SE10 ホテルスタッフの足音

【最初から最後まで流す】

【少し離れた位置で聞こえる】

【0—1秒ほど流した後、SE11と重ねて流す】

【小さな音量で流す】

SE11 主人公とミネルヴァの足音

【最初から途中まで流す】

【▲2でストップする】

こうして二人きりの時間は予想外の形で閉じられ、二人は、ホテルスタッフの先導で歩き出す。

少々、というか、かなり惜しくはあるが、朝からここまでやって来てくれた駅員の厚意をむげにするなんて考えられない。

一刻も早く会いに行く必要があるだろう。

〈主人公〉

「……行きましようか。

まさか、ホテルまで来て下さるなんて……！」

お待たせするわけにはいかないわ」

● 正面 30センチ

「ここから再び、すべて主人公に話しかけている。

穏やかに、でもとても感激して。

駅員の事について話す。

主人公の言う通り、まさか、ホテルまで来てくれるとは思っていなかったのですね、ええ、そうね。」

今日もこれからお仕事でしように、こんなに早くから来て下さるなんて。本当によい方ね。

一刻も早く、お会いしなくっちゃ。

【一呼吸おいて。

なんだか嬉しそうに、少し悪戯っぽく

……でも」

〈主人公〉

「……ん？」

▲2 ここでSE11がストップする。

ふとここで、ミネルヴァが立ち止まった。

ホテルスタッフの少年はまだ気づかず、先を行っている。

だから主人公はすぐに『どうしたの？』と尋ね、進行を促そうとした。
だが……。

ミネルヴァ『正面30センチ』から『正面0センチ』に移動して、キスする。

●正面 30～0センチ

「※顔を近づけてから※ キスする。

軽く触れるだけだが、ちゅっとな音のする甘々なキス」

ちゅ♡」

その時、ミネルヴァの唇が触れる。

主人公が言葉を返す間もなく、耳元にささやく。

ミネルヴァ、『正面0センチ』のまま『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【ホテルスタッフには聞かれない事を意識するかのよう」

そっとささやく。

甘くそっと、でも少し悪戯っぽくささやく」

今だけは……こちらが大事」※

そしてそのまま、またキスをしてきて……。

●正面 0センチ

「【※3回※】キスする。

軽く触れるだけだが、ちゅつと音のする甘々なキス】

ちゅ♡ ちゅ♡

ちゅっ……♡」

ミネルヴァ、『正面0センチ』から『左0センチ』に移動して『無声音ささやき』をする。
こっそり、主人公に耳打ちする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【ホテルスタッフには聞かれない事を意識するかのよう。に。
優しく、そっとささやく。

ひそひそととても嬉しそうに。驚いて言葉を失う主人公が、とにかく可愛いので】
愛してるわ……これから、ずうっと一緒よ」※

悪戯に成功した子どものように、主人公に微笑みかけた。

ミネルヴァ、『左0センチ』から『正面15センチ』に移動して話す。

●正面 15センチ

「【とても嬉しそうに、愉快そうに笑う。

主人公よりもずっと年下の少女のように、無垢に笑う】

……ふふ！」

〈主人公〉

「……もう！」

まったく、ミネルヴァにはかなわない。

主人公は思わずその肩を軽く叩くと、そのミネルヴァの白い手を握りしめて……再び一
緒に歩きだした。

ここでフェードアウトして終了。